銀論の位置

増井經夫

私はさきに和田博士還暦記念東洋史論叢に「銀經發祕と洋銀辨正」を書いて、清代中期以後中國に流通した洋銀がはげしい變造僞造をよびおこし、これの鑑別便覽として用意された商人の書について紹介を試みた。ただこの片々たる小冊子は、他に同類の書物も見當らないまま、ここに解說されている多數の術語から從來諸書に散見した商用語のいくつかをはじめて正確にすることができた他は、臆測による推論を敢えてせざるを得なかつた。すなわち一八二六年廣州で板行された「發祕」と一八五四年杭州で板行された「辨正」とは、ともに詐欺防止を謳つてきわめて相似的な內容をもちながらその性格を異にしていること、前者が變僞造に妥協的であるいは變僞造そのものの手引書かと疑われるのに對し、後者は鑑別に力點をおいて變僞造拒否を强めむしろ銀の官鑄公鑄への伏線を示していることである。しかしこれが廣東と浙江という地域差を背景にしたものか、中間にアヘン戰爭をはさんで三十年の經過に從つたものか、これにたやすく判斷を下す材料をもたなかつた。

このことは、問題自體は瑣細であるが、中國史が中央の動向を標識として把握され、地方差は方言や特產物なみにしか扱われない習慣のため、近代史ことに經濟や社會の問題解明を妨げている事實に若干の手がかりを與えてくれるのではないかと期待したところであつた。ところがその後、「銀論」と「貿易尺牘最新」の二書をみることができたので、いささか從前の推論を補足し、二三の所見を加えてかねての期待の一部に答えてみたいと思う。「銀論」は光緒十六年（一八九〇）廣東の謝氏の序をもち懷德堂刊行、十八年重刊、七十四葉の小冊子、「新增銀論」と題している。「貿易尺牘最新」は光緒九年（一八八三）吳門の

沌陽主人の序をもち朱氏刊行、内容は時令、稱謂にはじまり家族間の應酬や吉凶雜事の書信の模範文を集めたものでとくに商用文に限つたものではないが、冒頭にわずか二葉、洋銀圖と觀法聽法の解說がつけ加えられている。はじめこの二葉は製本時の竄入かと疑われたが、同書がみなこの形式で刊行されたことを確かめ得ている。

まずこの兩書について紹介すると、「銀論」ははじめに墨銀を中心とした洋銀約七十種の面背の圖樣をあげ、不正確な圖錄ではあるが種類はもつとも豐富で、如意銀、筆寶銀、土地公銀、紋銀足成などの中國製銀貨、雜港番頭、嘘吆銀などのインド・ルピー貨、日本の貿易銀、一圓銀貨、安南の明命通寶や香港弗貨まで含まれている。ついで釘銅、釘鉛、坐鉛、挿鉛、釘心、白心、鑲銀、鑲銅などの變造形式を圖示し、さらに墨銀鑑別の急所を十種圖解、銀貨緣邊のギザギザを八種、またローマ字を一々眞僞について鑄樣を圖說している。以上はすべて商人が當座の用にたてるよう整理されており、亂雜無秩序ではあるがこのような形で日常受授される洋銀への廣東商人の認識が固定していつたのであろうことを物語つている。そしてこの書は圖解の最後に、大書して天師印と天碓圖をあげているが、天師とは造幣局長の俗稱、洋銀の紋樣の雌型を鋼鐵で作つたものが天師印、これで銀貨を打出す工具が天碓、これらも輸入品であつたらしい。

同書の後半は約五十項に分けて眞僞洋銀の鑑別法を說き、その主なものは七字經風に記述して朗誦に資し、これらの教習には順序があり、まず緣邊のギザギザを吟味することからはじめ、次に紋樣や文字に習熟し、さらに銀色や鑄出の鑑別に習わねばならぬと結んでいる。このような內容とここに示された商人の知惠とは、まさに七十年前の「銀經發祕」をひきついだものであり、圖錄はほとんど「發祕」のものをひき寫し、その形式で種類を增し、解說もまた「發祕」を倣い、これを敷衍したものにすぎない。ことに天師印と天碓がそのまま圖示され、番國天師印來歷という解說を同文で踏襲していることは見逃せないところであろう。元來幼稚な私鑄用の器具まで圖解することは、眞僞鑑別にさして必要な用意ではなく、「發祕」がさらに錐銀や撞銀といつて銀貨を切つたり詰めたりする方法まで述べているのは、むしろ變僞造の作法を敎えるものであつ

たが、「銀論」もこれを捨て去つていないのである。さすが錐銀撞銀之法や紫府太微仙君功過格などは省いているが、なお變僞造への妥協が執拗にもちつづけられていたことは明瞭である。これは商人層が著作に不馴れで舊套に泥んだにすぎないといいきれるものではなく、このような便覽を必要とする情勢の持續という他はないであろう。

では「發祕」から「銀論」へいたる七十年間に、どのような變化を讀みとることができるだろうか。洋銀の種類が多數になり、國内の變僞造ばかりでなく、國外からも變僞造が流入して、廣東商人はこれに對處する知惠をいよいよ必要としていたとき、どのような意識が成長してきたものであろうか。これを示す一例に勾錢銀論というものをとり上げてみよう。「銀經發祕」にはこういつている。

「勾錢は又、瓦筒邊ともいい、元來眞銀であるが銀質も紋樣も呂宋の洋銀に劣るので、世人は喜ばず、一圓につき五厘乃至五分の値引が相場によつて行われる。看法は紋樣が大柄で文字が細いのに注意しなければならない。文字の中にGすなわち勾の字があるので勾錢とよび習わされたのである。」

看法についてはさらに詳しい記述があるがこれを略し、これを「銀論」でどのように解說しているかをみよう。

「勾錢銀は勾踐國から來たもので、邊欄は懷鼓とよばれる。これには大中小の三種があるが萬字邊という邊欄と同形式である。文字は小形で細く、紋樣の人物像は痩せて髮が薄い。勾字があるので勾錢といわれたというが、初期はもつとも通用したが、現在は通用しなくなつて久しい。銀質が低く相場で取引される。」

瓦筒邊とか懷鼓とかはギザギザが・〈型なのをいうが、勾踐國などが出てくるのは成長より後退を、變化より固定を示している。商人の知惠はこういう知識の獲得には進んでゆかなかつた。しかし土鑄論というものをひいてみよう。「發祕」にはこういつている。

「廣東省では紋銀が使われず洋銀が通用し、銀質は紋銀が十で洋銀が九であるのに洋銀にプレミアムがつく始末で、官吏が銀匠に命じ紋銀に白銅を加えて九二とし、天師印で紋樣を打出し軍民に通用させた。紋樣は洋銀の巧に及ばなかつたが銀質がよいので漸く流通し、後に銀質を八に下げたため通用は止まつてしまつた。」

この記述に對し「銀論」は次のように解說している。

「上鑄銀は乾隆年間から始まつたが、當時紋銀全盛であつたのに洋銀にプレミアムがつき、總督は銀匠に命じ九二銀で洋銀を倣成して通用させた。銀質はよいが紋樣は不出來で、當初はよく通用したが後に射利の徒が九二から八五、八と銀質を落して混用、鑑別し難かつたため通用されず、專ら洋銀ばかり流通し、土鑄の名は久しいが今日ほとんど見かけなくなつた。土鑄で四工大衣（カロルス四世銀貨）というのは蘇州におこつたもので、一割方紋銀より有利だつたので僞匠はこの地を目標に放出したが、大體九二の銀質で土鑄の質はよいとの評を得させたものである。土鑄で鷹銀（メキシコ銀貨）というのは佛山で作られたもので、中には銀質を落して八五や八としたものもあるが、九のものもあり、洋銀に比べて靑黑く不出來であり、現在は少くなつている。」

このように身近な事柄には七十年の間にその聰明を加え、その必要な來歷を確めている。「銀論」は「發祕」の系譜を守り、その枠の中で商人に必要な取捨選擇を行つたが、本質的な變革のなかつたことを示しているといえる。これはことさらそのような例をとり上げたのではなく、全篇を通じて指摘できるところで、道光から光緒へかけての中國の步みではなく廣東商人の步みを物語つているものに他ならない。それでは一方、「貿易尺牘最新」からは何が讀みとれるであろうか。前述のようにわずか二葉、それも尺牘とは何ら關係のないさりげなさで附加されているのは何を意味するであろうか。洋銀圖は鷹銀の陽面圖、陰面圖、倒鳥圖、三星圖の四圖をあげるだけで、觀法も聽法も要點を述べるに止つている。もつとも觀法の最後に變僞造については一々後に詳かにしようといい乍ら、これに當る記述がないのは、これが別の書物のため用意された部分か、未完成の書物のこの部分だけを利用したのか、今これを明らかにすることはできない。ただこれを尺牘に結びつけた蘇州の書肆の方針が問題になるのである。

しかしまずこの尺牘の觀法と聽法の大要からみていこう。觀法には「目による鑑別は何より細密に紋樣を觀察しなければならないが、近來は土鑄が增加したからこれを注意しなければならない。廣州台州で鑄出するものには朝坤、朝寶、朝聚の三種があり、四明や武林の土鑄も一種に

止らず、その銀色はぼけているので市場ではみな値引して取引している。ただ上海新鑄のものは出來がよく、市場で信用されている。一般に大英、呂宋、花旗、東洋などとよんでいるのはその鑄造地の名で、いずれも銀色は淨潔である。」聽法には「目でよく見た上はその音を聽いて目の鑑別をたしかめる必要がある。大英銀は音が淸で嬌、琴聲の如く、呂宋銀は音が朗で淸、たまには啞木もあるがそのときはよく銀色紋樣を見て、間違いがなければ値引すればよく銅とは限らない。銀色がぼけて周邊に裂け目のあるのは疑いなく銅である。大英銀の音が鈴のようなのにも銅の場合がある。」

このような直截で簡明なのは「洋銀辨正」にもみられた特色であり、早く蘇州方面におこつた中國銀貨の成功から變僞造壓倒への商人の自信が反映しているのであろう。「辨正」に神色、花紋、底板、花邊、聲音を五要法則としているのを、さらに觀聽二法に要約し、尺牘模範文を必要とする人たちへ贈ろうというのである。すでに「辨正」の篇成も鑑別法については紋樣を分解し、部分毎に眞僞の區別を正確にする方法をとつており、この處理の合理性は中國官僚の方法と繫がるものがある。尺牘文に結びつく契機もこれを別にしては考えられないので、南京上海の周邊の商人が官民の官を指向していたことを裏書きするものであろう。私は江浙商人や江浙市場に、この時期に成長する胥吏的性格を認め、これに對し廣東商人や廣東市場には、七十二行的性格を考えて見たいと思う。これについて以下若干の考察を加えよう。

まず外的要因として兩商人兩市場に共通するものに、外國貿易がある。洋銀も國內の蓄積の他はこれを通じて波濤のよせかえすように出入したので、私は昭和十年アメリカの銀政策で中國の銀が奔流のように流出する實情を見聞し、廣東港が銀貨の音に渦卷いていたのを思いおこすと、外國貿易が國內市場へ與える刺戟は想像外だつたと思わざるを得ない。そしてながい傳統をもつ廣東貿易がほとんど投機貿易に終始したのに對し、開港以後の上海貿易がいわば計畫貿易だつたことは、商人や市場に與えた影響の相違を、この一點にさえしぼり得るほどであつたろう。しかし貿易のように相互を對象とする行爲に、一方的な刺戟や壓力だけを條件とするのは、必ずしも妥當な操作とは思われ

ないので、この點をより細かに追求することはさし控えたい。かつ貿易の性格は、單に數量や品種だけでは決定されるものでなく、市場とヒンターランドこそ問題なのだからである。

では廣東と上海の市場にはどのような理解をもつたならばよいであろうか。まず廣東市場については、墟市に由來する國内市場と市舶に由來する外國貿易の二つを區別できるが、洋銀の流通についてはもちろん前者の受容態勢が課題である。廣東は早くから整然とした衛星都市を形成し、都市と農村を結ぶ墟、遠隔地商品の集散を果す市は、典型的ともいえる發達をとげた地域である。墟は北方の集と同じ定期市で、城市の内外を問わず無數に發生したのであり、廣州市内では同種商品の業者が一定の地區に參集する習慣はきわめて古くまで溯ることができるらしい。そしてこれがおそらく明末、外國貿易に十三行が結成されたのに前後して七十二行とよばれるように編成されたのではないかと思われる。これについて私は以前、「廣東の墟市」(東亜論叢第四輯)を書いて觸れたことがあるが、七十二行は新しくてかつ古い組織なのである。新しいとは自然發生的な市場、豪商支配の構成から數人の商人仲間で自制的に同業運營へ踏みきつたものと想像されるふしのあること、古いとはそのような組合がより大きな資本に吸收されることなく、ギルド的强制を持續したことである。二十世紀に入つてからも廣東案内書の多くに、七十二行の組合名を列擧し、この舊式組織がなお廣州市及び近隣の經濟界を統制して共和國の政策にまで影響力をもつことを紹介している。

もつとも七十二行的性格をもつて廣東市場や廣東商人のすべてを律したならば、生粹の廣東人や十三行商人の嘲笑を招くかもしれない。粤雅堂叢書の伍氏、海山仙館叢書の潘氏はともに十三行商人だし、これらの多くは官僚の地位を購い、やがては地方政治に介入し地方軍閥を操つたものである。それにも拘らず清代中期以後の廣東社會を象徴するものは七十二行であり、廣東經濟を支えたものはかれらの商魂だつたといわなければならない。「銀論」はこのような商人の知惠を盛りこんでおり、その意識を如實に反映したものであつた。それは政治的支配に對應し、これをいなしたりこれをまるめたりして商人の利益を追うもの、いわば厲害な精神であつた。

一方江浙市場は、蘇州、杭州、揚州、鎭江などの古い中心都市と新興の上海をもち、南京を控えている地域を、潤滑油のように經めぐらねばならない條件を備えていた。相違する傳統や利害が常に接觸し、交渉をもたねばならなかつた。私は先年、北京における同鄕會館などを中心に、縣、邑、州などを單位としたものは起原も古く明の嘉靖ごろまで溯るものもあるが、郡や省を單位としたものは多く後に建設され、會館の地方單位が大きいほど、官民の官の方へ近よつて官僚の社交クラブとなり、省館の中には科擧受驗生を拒否するもののあることを指摘したことがあつた（東亞問題終刊號東亞史研究所收「會館錄數種」）。そのとき都門紀略などにみえる會館で、省館をもたない地方に江蘇、湖北、湖南などのあることに氣付いて、これの說明をなし得なかつた。もつとも實際には省館はなくとも、代行できる中心的な施設があつたのであろうが、北京で全省を一單位としないでもすむ出身官僚をもつたためか、中央政府との連絡をさして必要としない地元の勢力を示すものかであつたろう。由來會館は地方產業を地盤とし、地方から中央へ官僚群をおし出すバルブの役目を擔つたものであつたが、兩湖地方人が廣東人同樣厲害の評を受けたのも、ここに何か反映させている理由があるのであろう。湖北湖南はさておき、江蘇の實情はどうであろうか。

これも江蘇出身官僚の地位や人數を調べて結論づける性質のものではなく、會館のバルブへ官僚候補者を送りこんでくる地元の性格によつて決定されるもので、高級官僚にたよることなく獨自に處理できる能力とその方が有効で有利なことを知つている知惠が、そのもつとも適切な答えになるようである。これこそ胥吏的な性質で、下級官僚の意識である。利害が異り背景や構成を別にするいくつかの中心都市を調節し統合してゆくには、何よりこのような胥吏的手腕を必要とし、それなりに合理的な事務能力を附與したものであろう。もつともここでも胥吏的性格をもつて江浙市場や江浙商人のすべてを律したならば、生粹の蘇州人や杭州人の抗議をうけるかもしれない。政治を白眼視する高蹈的な隱遁趣味はお家藝であり、纖細な風流と優美な文雅はここを淵叢としているからである。それにも拘らず寄生する文人墨客をひきずつて、江浙社會を支え、江浙經濟を運營してゆく階層には、胥吏的氣質の成熟を認めない

わけにはいかない。これは官界游泳、ひいては國際勢力の間を縫う方向と自衛的な獨立の姿勢をもち、統制の維持につとめようとする方向の、未分化の段階と思われるが、ともかく支配のかげで別の世界にとじこもろうというのでなく、支配に結びつき、これを自らの手にしなければならないという線を明らかにしていたようである。そしてこのような性格は、上海開港後に濃厚となつたものとみられ、個人的には跡づけられるものがあつても、その一般化はおくれたというべきであろう。

このように清代中期以後の動向を、地方差から推してみることは必ずしも無用の業ではないと思われる。同時期をただ宮廷をめぐる要人の進退や國際關係のかけひきから、中央政權の崩壞と植民地化の進行ばかりを課題としていても、民國以後の方向を指さす力を探し當てることはむつかしい。また家產や共同體の形態論や制度史からも、動きをとらえ動きの裏を察することは困難であろう。むしろ近代國家以前の統一支配が分解した場合、何が待ちうけていたか、軍閥や財閥をどのように受けいれたり育てたりしたか、その事實はこのような考察から解明の手がかりが得られるのではないかと思われる。しかし地域の性格は、これを代表するものが農民にせよ、市民にせよ、これが特長づけられた場合は、必ずやこれをおし出してきた事情があり、他の地域か他の時代から區別されるべき必要があつてのことで、これを無視して一概に固定的のものとすることはできない。ある時點における、ある强度というのが、歷史的條件になるのであろう。この小篇に扱つた「銀論」が、十九世紀はじめの意識をその世紀の終りにももちつづけていたことを示すのは、廣東でも商人層だつたことを忘れてはならないし、「尺牘」に結びつく銀貨圖は、蘇州でも十九世紀末になつて出てきたことを見落せないのである。そしてここに映し出された兩地域の商人層の性格が、清末の事態に無關係であったとはいいきれないところであろう。

× × × × × ×